

阿保城(別名無)(指定無)(伊賀市阿保上ノ代 885-11)(阿保頓宮跡)

阿保城は安保氏によって築かれた城です。安保氏は伊勢国司・北畠氏の重臣として、多気御所に仕えていました。1585年(天正13年)に大和郡山城主であった筒井定次が豊臣秀吉の命により、伊賀に国替えを命じられると、阿保城には重臣の岸田伯耆が城主となりました。江戸時代に筒井定次が改易されるとともに廃城になりました。城址には土塁の遺構を確認することができます。

「攻城団」による

阿保頓宮跡

大常夜灯は美杉村に通じる八知街道との分岐点にもなっており、八知街道を南に200mも進めば阿保親王墓(息速別命墓)や阿保頓宮跡碑があります。

阿保頓宮跡は息速別命墓の東側にはあり、入口に洒落た道標がありました。道標に従い小さなアマガエルたちが飛び跳ねる階段を登り丘の上に出ると阿保頓宮跡碑が草原の台地にポツンと建っています。

阿保頓宮跡の向かい隣の阿保親王墓がありますが、そこで眠る息速別命には異母姉妹である初代伊勢神宮齋宮の倭姫命がいました。齋宮は天武天皇により制度化され600年以上続きますが阿保の地は大和と伊勢の中継ポイントで、齋王の往復時の宿泊所である阿保頓宮も設けられました。

この阿保頓宮跡碑は聖武天皇が一夜を明かされた場所でもあります。聖武天皇は天平12年(740)、藤原広嗣の乱を恐れて、伊賀国、伊勢国、美濃国、近江国を巡り山城国の恭仁京に移りました。阿保頓宮はその長旅で一夜を明かされた仮の宮居の跡です。

「エナガ先生の講義メモ」による

